

「岩波の子どもの本」における外国絵本受容について⑥

近藤 昭子

(頌栄短期大学)

1. はじめに

「岩波の子どもの本」シリーズにおける外国絵本受容は、主に原著との差異をみることで明示できると考え検討してきた。シリーズには合本の形が8冊ある。(初期24冊のうち)今回はそのうちのひとつ「ツバメの歌」(ツバメの歌/ロバの旅)として採用された「ロバの旅」について述べる。シリーズでは合本のため評価の対象にはならなかったのではないだろうか。テキストには以下のものを使用した。

①「ロバの旅」(石井桃子訳1954)

② A. CLARK: *Looking-for-Something*, Illustrated by Leo Politi (Viking 1952 初版 22.5×19.0)

比較する項目は①文・単語などの削除②文・単語などの附加③時代や文化の相違による改変④文体や解釈の特徴⑤文全体及び絵について、である。

2. 本論

5つの項目についてテキストとの比較で異なる点を中心に検討する。(傍線は削除部分、筆者による)

光吉夏弥は①について「『ツバメの歌』はその頃絵本画家として評判になりだしたポリティの同名の本と、インディアンもので有名なクラークの文章にポリティが絵をかいた『ロバの旅』を合わせて一冊とした。」と記す。ポリティはイタリア系移民の両親の下でアメリカのカリフォルニアで生まれる。7歳の時イタリアに戻り、15歳でミラノの国立芸術所でアートを学ぶ。21歳(1931)の時、アメリカのロスアンジェルス人のメキシコ人地区に居を定め、地方の異なる文化や人々の多様性に強い関心をもち、特に人々・動物・鳥などや花々といった素朴で自然の温かい地上の生き物に対して強い愛を感じ具現化した。*Little Pancho*(Viking 1938)のデビュー作です。既に際だった特徴をもつ絵本画家であった。*Song of the Swallows* は彼の5作目の作品(コールデコット賞)であり、この作で絵本作家としての評価は高まる。*Looking-for-Something* はポリティの円熟した時代の作品である。

一方クラークはアメリカ教育財団に属し、*In my Mother's House* (Illustrated by Velino Herrers Viking 1941)ではじめて、アメリカの原住民の子どもたちのために、彼らが日常生活について読んだり理解したりすることができるような本を、シンプルで韻律詩の形で表現した。クラークが詩の形式を文

章の基本においたのは、アメリカの原住民の文化への深い豊かな理解と彼らの生き方への敬虔な理解の上にきづかれている。すなわち口碑を大切にすることの率直な語り、大地からの力強い静かな美を発見し、それを生かすことが彼らに語りかける最適な方法だと気がついたからだ。作品はアメリカの原住民のために書かれたものであったがどの国の子どもも人間として、人間として同じであるというクラークの確信に基づいて書かれているため、他の子どもにとっても楽しいものであるという結果につながっていた。*Secret of the Andes*(Viking 1952)は児童文学でニューベリー賞を獲得する。ニューベリー賞受賞のスピーチでは、アメリカの原住民や子どもたちへの関心は、自分の生まれたニューメキシコでの幼い日の体験にもとづき、それは近所の家に所属していたアメリカの原住民のぬくもりあるやさしい人々やアイルランドからやってきた祖父の妖精達からの贈り物の思い出であった、という。同年、クラークはより低い年齢の読者を意識して自己の存在への根源的な問いかけを *Looking-for-Something*、で挑戦した。

①の項目に固有名詞の削除(57ヶ所)がある。その中には具体的な場所(3ヶ所)の他に Gray Burro があり、Gray は大文字にかかれ固有名詞に扱われているが、①では全部削除される。名詞の省略(5ヶ所)、他に語句の省略(19ヶ所)、形容詞の省略(17ヶ所)その中に dark/ bare/ wild/ poor などがみられる。文章の省略(50ヶ所)もある。By now he was very good at walking away.の文章は、ロバの心境や判断を表現した箇所である。この作品はロバの心の変化とそれに伴う行動が物語を前進させていく要素になっている。文章削除は物語の奥行きを弱め、テーマを掘り下げて考える要因を削ることにもなる。削除の中には詩形式で語られている箇所の繰り返しの言葉や文章にも多くみられる。

2では1でとりあげた Gray Burro の Gray を削除しているが、①では“小さい”(83箇所)が附加される。これについては次に詳しく述べる。3は最後の場面でみられる。

②ではロバは男の子のものになり、彼の家族の住む高床式の“家の下”につれていかれる。①では“小屋”とかえられる。しかしその後続く文章には“家の下”という文章があり、矛盾がみられる。

④ Sometimes he met men and cattle./ Sometimes he met men and sheep./ Sometimes he met men and oxen. ロバが旅の途中で出会う人々や動物のことを記述している。④' のロバの視点で動物も人間も同じ位置におかれた描写の仕方がされるが④では、牛をつれている人/ ヒツジをつれた人とされ、人間中心主義の視点にかえられている。又④' のタイトルは *Looking-for-Something* であるが、④では「ロバの旅」に変えられ、クラークの作品の意図が明らかでなくなる。

⑤④は、逆判(8ヶ所)利用、判型の相違などが見られるが、④' の絵を採用している。その絵は、澄んだあたたかい絵の水彩画で全体にシンプルで素朴に描かれている。

3. 問題点

「ロバの旅」は「岩波の子どもの本」シリーズの編集者達の外国絵本受容の視点が把握しやすい作品である。上記でのべたことを次の三つの視点、A. 固有名詞の扱われ方。B. “語り”の文体の生かし方。C. テーマ (*looking-for-something*) の扱い方。からみる。

A. 固有名詞の扱われ方について

④' は主人公 Gray Burro の *looking-for-something* の物語である。Gray Burro 固有名詞化されているが、一方でロバの運命又は道のりを暗示的に示唆した gray (形容詞) の意味も生かしている。④では Gray を削除して“小さい”(84ヶ所)が附加され、“小さいロバ”が強調されている。そこには、子どもにとって、この方が喜ぶだろうという編集者達の意図がみえる。いいかえれば「子どもの感じ方を聖域として子どもの好みを単に迎合してしまう」(注1)という幼児観につながる考え方でないだろうか。Gray Burro は固有名詞をもつ主人公であり、Gray は個性でもある。個性が尊ばれていないことは固有名詞の省略と共に、シリーズにみられる受容の特徴として指摘してきた。

B. “語り”の文体の生かし方について

先に述べたようにクラークは“語り方”に特徴を見出すことのできる作家である。

④' は低い年齢、識字率の低い人々にも読まれることを意識して、言葉を丁寧に選び大切な言葉や文章は度々くり返される。Banana trees. Banana trees. That was all he saw. はくり返しの文章とロバが自分の居場所を確認している箇所である。

Looking-for-Something は“灰色”ロバの心の変化と居場所の確認が物語を前進させる。“It's time I looked around.” he thought. もその例である。又、物語が単調に平板にならないように、詩形式の文体

でリズム感を取り入れたり、物語の流れが重くなると間をあけるなどの工夫をする。そのことが次の文章ではよく理解できる。

④' Gray Burro did not move.

The cornstalks and the little feet came walking slowly and slowly and slower and slower and slow and slow.

They stopped.

④ 小さいロバも、じっとしていました。トウモロコシのたばと、小さい足は、ゆっくり歩いて、だんだん、そばへやってきました。そして、とまりました。

C. テーマの (*looking-for-something*) について

When he was tired and hungry or when he was lonesome and afraid, he would touch his ears forward and then follow them.

“灰色”ロバが疲れておなかがへったりした時、あるいは一人ぼっちでこわいと思った時、彼の耳についていったという箇所である。*looking-for-something* の旅は困難が伴う。しかし子どもたちは未知の世界に勇敢に立ち向かわなければならぬことや、大人が橋をかける役目の重要性もクラークは充分知っていた。tired/ hungry/ lonesome/ afraid などの“灰色”ロバの体験は、*looking-for-something* を求める人間の痛みでもある。この文章の省略は、「子どもの文学」(1960 中央公論社)の「童話という形式を用いて死であるとか孤独であるとか、もののあわれを語ることがどんなに不適当なものであるかは歌米の児童文学の歴史がはっきり説明してくれる。」の言葉を思い起こさせる。“灰色”ロバの体験は、子どもたちにとってマイナス(又は不必要)になるという思想と連なるのではないだろうか。④' は 1950 年代という時期に、幼年文学に“アイデンティティ”をテーマにした作品の紹介は日本では早い時期のものであったと思われるが④' の意義を把握して採用されたとは考えにくい。

4. 結論

④は早い時期にシリーズに採用されたが④' のタイトルの変更、固有名詞の変更、言葉や文章削除、語り方の相違や作品の意図など十分に伝えられず、単なる「ロバの旅」の物語の紹介になったのは残念である。

(注1)『日本児童文学』(1994.1・2月号.P.14)